
カレーうどん騒動顛末

来流華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カレーうどん騒動顛末

【Nコード】

N0200Q

【作者名】

来流華

【あらすじ】

カレーうどんの正しい食べ方とは

この小説は作者のそんな疑問から生まれた作品であります。

この小説を読んでカレーうどんに関わらずさまざまな料理の食べ方について皆様が考えていただけたら幸いです。

「なあ、お前の食い方おかしくね？」

昼休み、学生で賑わう食堂で俺の友人、矢田武人が問いかけた。

一瞬自分の事かと思って顔を上げたが、対面に座る矢田武人の視線は俺の隣に向けられていた。

内心ホツとしつつ隣に座る友人、丹波幸宏の方を見た。幸宏は箸をおいてやや怪訝そうに目を細めて言った。

「別におかしくはないと思うが」

「いや、おかしいって、絶対おかしいから」

武人が少し身を乗り出しながら否定した。隣の幸弘の食べ方など気にもせず中華丼を食べていた俺はそれほどにおかしな食べ方を幸宏がしていたかと武人に聞いた。

「ああ、こいつカレーうどんを飲むように食うんだぜ」

確かに奇妙ではあると俺は思った。クラスでもリーダー的な存在で周りより大人びて見える幸成がそのような幼稚な食べ方をしているなんて考えづらかった。俺は半信半疑の視線で幸成を見た。

「確かにそんな食べ方をしているが、おかしいとは思わない」

「いや、それがおかしいんだって！」

武人が強く否定した。それを機に場の空気が剣呑になった。

「どこがだ？」

「箸ちゃんと使ってないし、なんでそんな重いどんぶり持ち上げてるんだよ！」

俺は幸成の前に置かれている「重いどんぶり」なるラーメンどんぶりを見た。ここの食堂は種類が豊富で値段もそこそこ安価だがなぜか食器の大きさとあってない料理がいくつもあった。俺の中華丼も小ぶりのどんぶりにあふれんばかりに盛られていた。そんな料理の一つのカレーうどんを頼んだ幸成はやや強く言った。

「これが私の考えた一番納得のいく食べ方なんだ」

「わざわざそんな重いどんぶり持ち上げる食い方がか？」

「そつだ」

「いや、おかしいってどこが納得できんだよ」

「この食べ方は服を汚さない」

なるほどと俺は思った。真つ白な制服を着用義務とされている生徒たちにとってカレーうどんのつゆなどは天敵だ。普通にラーメンや蕎麦の感覚で食べると服を汚したときの精神的苦痛が大きい、シミの付いた制服で午後の授業を受けたくはない。武人も納得したのか苦い顔になった。しかし散々食べ方を指摘していたために意地になったのか、だからってそんな食べ方はないだろう……。とつぶやきながら焼き魚定食をつつきだした。幸宏も何もなかったかのようにどんぶりを片手で軽々と持ち上げて箸で流すようにカレーうどんを食べ出した。俺は気まずい雰囲気の中、クラス内の幸宏細マッチョ説は当たっているかもしれないと思いながら中華丼の残りを食べ始めた。

午後の授業中、いつもどおり背筋を伸ばし真面目に授業を聞いている幸宏の制服がいつもより白く見えたのはそんなくだらしない会話があったからだと俺は後になって思った。

「やっぱり納得いかねえ」

次の日、いつもどおり食堂で昼ごはんを食べ始めようとしていた俺と幸宏に武人は言った。

「なにがだ？」

幸宏は武人を一瞥し唐揚げ定食を食べながらいつもどおりの声で聞いた。

「カレーうどんの食い方だ、あんな食い方しなくても汚さない食べ方があるはず、てか絶対えある！」

「そうか、なら頑張るんだな」

意気込んでカレーうどんの乗った盆を置く武人に幸宏は冷めた感じで言った。いつもなら三人のうち真つ先に購買機で食券を買う武人が俺たちに順番を譲った時の顔が若干真剣だったのはこの所為か、悩むのだったら違う料理にすればよかったのにと俺は呆れた。そんな二人とは対称に武人は妙に真剣な表情で割り箸を割った。「いただきます」と武人が言いカレーうどんを食べ始めた。散々幸宏の食べ方を非難した武人だ、その本人の食べ方はどうだろうと俺は注視した。武人は左手でラーメンどんぶりを抑え、右手の箸で麺を掴み口へ運ぶといった麺類を食べるときの一般的な食べ方をした。ややゆっくりとした動作なのは汁が飛ばないように気を付けているのだろう、俺は拍子抜けしながら自分の揚げ物定食を食べ始めた。賑やかな食堂にここだけ静かな時間が流れた。

いつもなら武人が他愛もない話を持ちかけてくるのだが、今日はカレーうどんを綺麗に食べるのに忙しいらしい、俺はたまにはこんな食事もいいかと思いつながら箸を進めていた。

「ああ、やつちまった！」

俺が最後の楽しみに残していたうずらの揚げ物を食べようとしたときに武人が大声で言った。

かなり大きな声だった所為か食堂にいた生徒が何だというように武人を注目した。俺はうずらの揚げ物を皿にもどして武人の制服を見た。案の定そこには茶色いシミができたいた。

「綺麗に食べれなかったようだな」

幸宏が言った。武人も痛いところを突かれて苦い顔をしたがこちらにどんぶりを傾け幸宏に言った。

「でもよ、ほら、もう少して食べ終わるところだったんだぜ」

「そうだな、だが立派な勲章が制服にできたな」

武人の制服のシミを見ながら幸宏が嘲笑するところさうさまと言

い盆を片付けに行った、武人は反論できないのか苦い顔で唸っていた。俺はうずらの揚げ物を一口で食べ、武人に先に行ってるぞと言
い盆を片付けに行った。

午後の授業開始間際に教室に入ってきた武人の制服の勲章が薄い
茶色になっていたが大きくなっていたことは言及しないでやるうと
思いながら俺は机に突っ伏した。

「今日こそ完璧に食べてみせる！」

武人は意気揚々と箸を割りながら言った。昼休みになると同時に
食堂に走り一番に食券を買った武人は俺と幸宏が到着するのを待っ
ていたようだ。俺はマーボー丼が乗った盆を持ちながらいつもの場
所に座った。武人の前にはカレーうどんがあった。

幸宏は何か言いたそうな顔をしたが結局何も言わず月見うどん定
食を食べ始めた。俺は昨日より意気込んでいる武人に頑張れよと一
声掛けてマーボー丼を食べ始めた。昨日と同じように静かな時間が
流れ出した。途中話題を持ちかけようとしたが武人の真剣な表情で
食べる様子を見ると声を掛けるのをためらってしまった。隣の幸宏
は普段から食事のときは静かだったのでいつもどおり食べていた。
俺は会話を諦めて武人の食べ方を観察した。ぱっと見昨日と食べ方
は変わっていないかのように見えたが、武人は麺をほとんど一本ず
つ箸で掴み慎重に口に運んでいた。俺はおいおいと呆れながら食べ
終わった丼を下げに椅子から立った。一応無駄だと思っが先に言っ
てるぞと言い盆を片付けに言った。

昼休みの終わりかけ、教室で談笑していると武人が入ってきた。
昨日とは違い制服に汚れはなかった。俺は食えなかつたかと問うと、
ああと低い声で答え武人は机に突っ伏した。午後の授業に間に合う
ように食堂は昼休みの終わる十分前から閉店するので、そのとき食
べている生徒は必然的に追い出される。一応追い出された後も食堂

外のテラスで食べられるが、周囲の生徒の視線を受けながら食べる猛者は年に数回しかお目にかかれなかった。武人はその猛者にはなれなかったようだ。

「やっぱりおいしく食べるのがいちばんだよな」

そう言い豚カツ定食の乗った盆を武人は置いた。

あれから十日が経過した。昼休み、いつもの場所で定食を食べていた俺と幸弘はやつとかと安堵の顔をした。

「飽きたか？」

「ああ、飽きた飽きた、もうカレーうどんなんか一年は見たくないぜ」

武人は笑いながら言った。その様子を見て幸弘はそうだろうといいながら若干笑いながら答えた。正直静かな食卓とカレーの匂いといい加減うんざりしていた俺も笑いながら他愛もない話題を投げかけた。それに武人が重ね話題は本当に他愛のないものになっていき、少し周りに迷惑かなと思いつつもより饒舌になってしまったのか三人の中で食話を楽しんだ。いつもより饒舌になってしまったのか三人の中で食べ終わるのが遅くなった俺に武人と幸弘が先に行ってるぞと行った。俺は了解と言うと急いで料理の残りを食べ始めた。食べ終わり盆を片付けに行くと見慣れない箱が置いてあった。

「ご意見箱

そう箱には書いてあり、横には紙とボールペンが用意されていた。俺は気になって食器を洗っているバイトの人に聞いた。

「ああ、それ今日から置くことになったんだ。十日ぐらい前からかな毎日カレーうどんを頼む子がいね、しかも最後まで居残るから食

堂で噂になっていたんだよ。その子に昨日聞いてみたらカレーうどんがどうしても時間内に綺麗に食べれないらしくてね。どうもこのカレーうどんはつゆがさらさらしているから食べづらい、もっとどろどろにしてくれて文句言われちゃってね。もしかしたら他にもそういう意見を持つ子がいるかもしれないと思って作ってみたんだよ。君も意見があったらぜひ書いてね」

俺はそうでしたかと言い、盆を片付けた後ご意見箱の置いてある机に向かった。そこで俺は紙とボールペンを持たずご意見箱を持ち上げて軽く振った、中から一枚分の折り曲げられた紙の音がカサカサと聞こえてきた。俺はその紙に書いたのは多分、いや絶対あいつだよなと確信しつつご馳走様と言いながら食堂を後にした。

以上が我が愛すべき学校の食堂にご意見箱が置かれるようになった経緯である。

(後書き)

ご読了ありがとうございました。感想や誤字をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0200q/>

カレーうどん騒動顛末

2011年1月8日15時10分発行